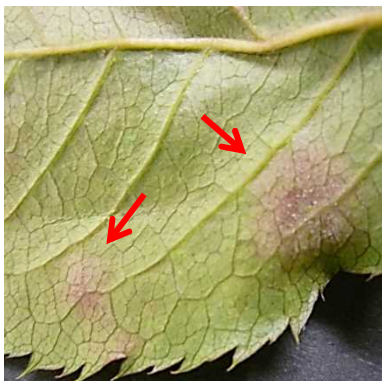


作物名：ばら

病害虫名：べと病（病原：*Peronospora sparsa*）



葉表の病徴



葉裏の病斑



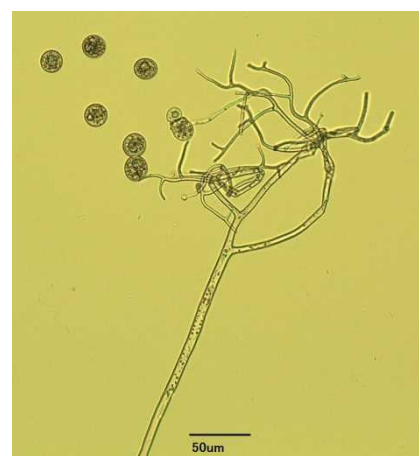
花梗の褐色病斑と白色の卵胞子塊

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・葉、茎、花梗などに発生し、まれにがくの基部や花弁にも発生するが、主に葉での発生が多い。
- ・葉では、はじめ小さな水浸状の斑点であるが、やがて直径1 cm 前後の不整形の灰褐色または紫褐色のシミ状病斑となる。
- ・多湿条件では、葉裏の病斑にもややしたかび（分生子柄と分生子）が生えるが、低湿条件ではほとんど認められない。
- ・病斑が形成された葉は、部分的に黄変し落葉しやすくなる。
- ・茎や花梗では、紫褐色または暗褐色の斑点が現れ、のちに拡大して長さ2cm 以上の細長い病斑となる。

2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌の伝染源は、宿主であるばら自身で、通常、茎の病斑上で菌糸や卵胞子の形で越冬し、第一次伝染となる。
- ・本病菌は、葉裏の気孔から侵入し、葉組織内で菌糸をまん延させる。まれに病組織内に卵胞子を形成する。
- ・多湿時には気孔から分生子柄がかたまって生え、その先端に形成された分生子が飛散することにより空気伝染する。被害落葉上の分生子は乾燥条件でも1か月間生存する。



べと病菌の分生子柄及び分生子

3 発病・伝染好適条件

- ・病原菌は糸状菌の一種でべん毛菌類に属し、分生子、分生子柄及び卵胞子を形成する。
- ・本病菌の分生子は低温・多湿条件が続くと形成される。
- ・分生子の発芽適温は18℃で、かなり高い湿度が必要で、水滴中では容易に発芽する。
- ・発病適温は15～20℃で、感染には湿度85%以上が必要である。
- ・昼夜の温度較差が大きく、特に夜間に結露するほど湿度が高い場合に発病が助長される。
- ・施設栽培の秋～春にかけて発生が多い。

4 防除対策

- ・多湿条件は発生を助長するので、通風を良くする。
- ・葉、花、茎等の罹病部位は伝染源となるので見つけ次第切り取り、ほ場外に持ち出し処分する。
- ・発生がみられたら、速やかに薬剤散布を行う。散布はムラのないよう丁寧に行う。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧病害虫診断防除編9（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編8（農文協）、バラの病気と害虫 見分け方と防ぎ方（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所、宮城県美里農業改良普及センター撮影